

令和3年度広島県公立高等学校入学者選抜一般学力検査の結果について

- ・令和3年3月8日(月)・9日(火)に実施した、令和3年度広島県公立高等学校入学者選抜の選抜(Ⅱ)における一般学力検査の結果を取りまとめました。
- ・この結果については、教科指導の参考とするため、県内公立中学校及び高等学校等に配付します。

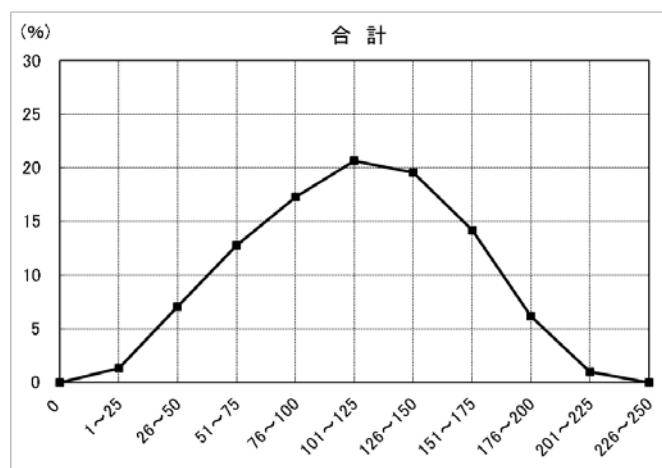
【一般学力検査結果の概要】

- 5教科の平均点は22.9点(令和2年度は25.8点)

各教科の平均点は次のとおり

教科	国語	社会	数学	理科	英語
平均点(50点満点)	21.5	26.5	21.1	24.4	21.1

- 5教科合計の得点分布は、全体の中央が高くなった山形になっている。5教科に共通した課題として、日常生活などを想定した課題解決の場面で、資料等から読み取った情報を、既習の知識や学習内容等と関連付けて考察し、自分の考えをもったり判断をしたりして、その過程や結果を表現することが十分にできていない点が挙げられる。



I 一般学力検査結果の概要

令和3年3月8日（月）・9日（火）に実施した広島県公立高等学校入学者選抜における一般学力検査について、その概要を取りまとめたので、今後の学習指導の参考としてください。

1 出題について

一般学力検査問題の出題に当たっては、中学校学習指導要領に示された各教科の目標に基づき、分野・領域のバランスに留意するとともに、基礎的・基本的な内容を中心に出题した。また、総合問題や記述問題などを取り入れることによって、思考力、判断力及び表現力等をみるよう配慮した。

出題の大問数等については、次のとおりである。なお、英語においては、例年どおり実音聴取による問題を出題した。

各教科における設問数

内容	国語	社会	数学	理科	英語	合計
大問数	4	4	6	4	4	22
設問数	21	22	19	25	24	111
選択問題	3	10	2	7	9	31
記述問題等	18	12	17	18	15	80

* 記述問題等には、漢字の書き取りや選択した理由を併せて記述する設問を含めている。

2 検査結果の概要について

各教科の平均点、標準偏差及び得点分布については、次のとおりであった。

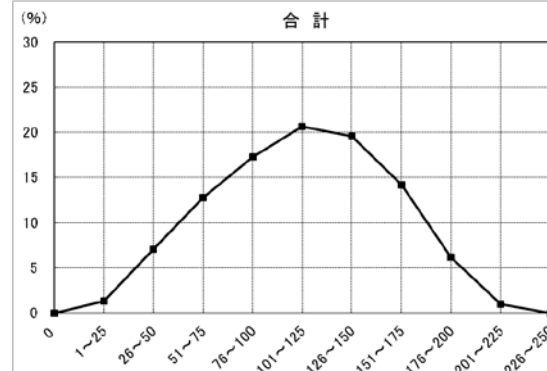
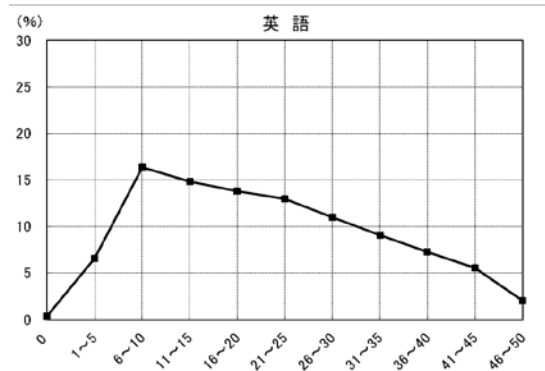
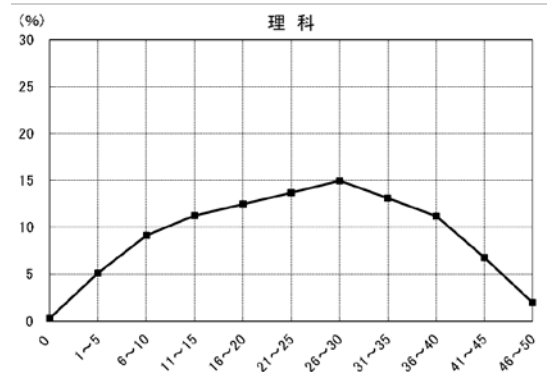
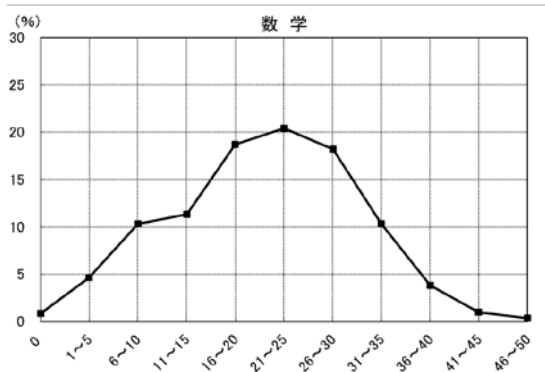
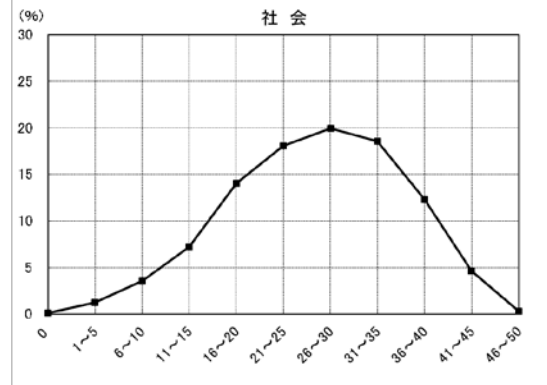
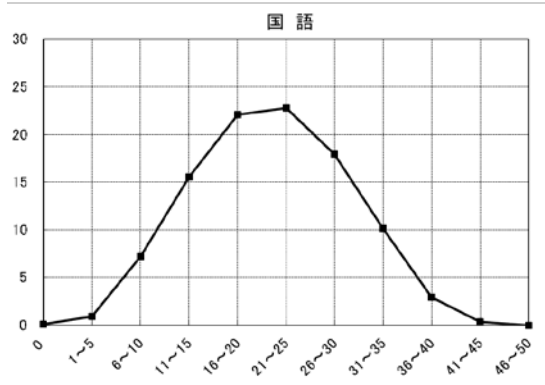
各教科（50点満点）の平均点

教科	国語	社会	数学	理科	英語	5教科平均
令和3年度	21.5	26.5	21.1	24.4	21.1	22.9
令和2年度	26.5	22.0	28.2	28.6	23.9	25.8

各教科（50点満点）の標準偏差

教科	国語	社会	数学	理科	英語
令和3年度	7.7	9.1	9.3	11.7	11.9
令和2年度	8.4	10.1	12.2	12.5	10.4

(各教科の得点分布)



5教科合計の平均点は昨年と比べ下降した。得点分布の状況を示すグラフの全体の形はその中央が高くなった山形になっている。全体として知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力及び表現力等が十分に身に付いていないと考えられる。

各教科の得点分布をみると、国語及び数学では全体の中央が高くなった山形となっており、応用的な問題に十分に対応できていない受検者が多いと考えられる。社会では全体の形が右寄りの山形になっており、基礎的・基本的な学習内容が定着している受検者が多くいると考えられる。理科では全体の形がなだらかな山形、英語では、全

体の形が左寄りの山形になっており、いずれも基礎的・基本的な学習内容の定着が不十分な受検者が多くいると考えられる。

教科別にみると、国語については、昨年と比べ平均点は下降した。30%以下の得点層に属する受験生が多く、60%を超える得点層に属する受検者は減少した。今後学習を進めていく上での基盤となる「漢字の読み」と「漢字の書き取り」についての正答率はそれぞれ95.9%、90.2%と高い。領域別にみると、説明的な文章についての正答率が低い傾向がみられる。また、話の展開に即して人物の心情を的確に捉え、語句や描写などについて、その意味や効果を評価しながら読み、それを適切に表現する力に課題があると考えられる。

社会については、昨年と比べ平均点は上昇した。30%以下の得点層に属する受検者は減少したものの、全体の12.1%と少なくない。分野別にみると、公民についての正答率が低い傾向がみられる。また、歴史的分野と公民的分野を融合した出題において、資料を読み取って考察し、それを表現する力に課題があると考えられる。

数学については、昨年と比べ平均点は下降した。60%を超える得点層に属する受検者が大幅に減少した。30%以下の得点層に属する受検者は増加し、全体の27.1%と多かった。今後学習を進めていく上での基盤となる「簡単な数・式の計算」については正答率の平均は78.6%と高い。領域別にみると、図形についての正答率が低い傾向がみられる。また、統計について、与えられた資料を基に、事象を数学的に判断し、その理由を数学的な表現を用いて説明する力に課題があると考えられる。

理科については、昨年と比べ平均点は下降し、60%を超える得点層に属する受検者が減少した。30%以下の得点層に属する受検者は増加し、全体の25.7%と多かった。領域別にみると、「エネルギー」を柱とする領域についての正答率が低い傾向がみられる。また、「地球」を柱とする領域において、温暖前線に伴う雲の特徴について考察し、それを表現する力に課題があると考えられる。

英語については、昨年と比べ平均点は下降した。30%以下の得点層に属する受検者は増加し、全体の38.2%と多かった。領域別にみると、日常生活の場面において、表現内容を工夫してコミュニケーションを行うことについて正答率が低い傾向がみられる。特に、会話文の内容に基づいて、自分の考えが読み手に正しく伝わるように英文を書く力に課題があると考えられる。

5教科に共通した課題としては、日常生活などを想定した課題解決の場面で、資料等から読み取った情報を、既習の知識や学習内容等と関連付けて考察し、自分の考えをもったり判断をしたりして、その過程や結果を表現することが十分にできていない点が挙げられる。

この点を改善するためには、まず、日常生活や自然・社会における事象の考察、また、コミュニケーションの場面などにおいて、目的や状況等に応じて判断したり表現

したりするのに適切な課題を設定することが重要である。そして、その課題を解決する過程において、精査した情報を基に自分の考えを形成して文章や発話によって表現し、さらに、お互いの考えを適切に伝え合い多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりして、自分の考えを広げたり深めたりすることが重要である。この学習指導を行う際に大切なのは、それぞれの教科の特質に応じた見方・考え方を働かせて思考・判断させていくことである。新学習指導要領及び広島版「学びの変革」アクション・プランにおける「主体的な学び」において大切なことは、各教科等の内容の本質的な理解である。そのためには、習得・活用・探究の過程の中で、各教科における見方・考え方を働かせる学びを設定するとともに、教科等横断的な視点を取り入れた指導を行うことで、深い学びにつなげていくことが重要である。

また、高等学校においても、各教科・科目の系統性を理解した上で、義務教育段階の指導状況や生徒の発達段階、生徒の言語能力を踏まえ、授業の構成や指導の在り方を工夫・改善していく必要がある。